

地球温暖化を招く二酸化炭素など温室効果ガス

京都議定書 先進国が減らす目標を定めています。京都で1997年に開かれた第3回気候変動枠組み条約締約国会議で決まりました。各国は2012年までに目標を実現する責任があります。日本の場合、08～12年の5年間平均で温室効果ガスの排出を1990年より6%減らす義務があります。二酸化炭素では1億5000万トンになります。条約の事務局によると、日本など主な先進国26か国が2004年に出した温室効果ガスは過去最大で、基準の1990年よりも11%増えました。事務局は「さらに強い削減策が必要だ」と指摘しています。

植物から作られて、ガソリンの代わりになる燃料、バイオエタノールを国内で生産する目標数字を、安倍晋三総理大臣(首相)が掲げました。年間六百万リットル。ガソリン消費量の約一割に当たります。現在の二十万倍にもなる大増産ですが、多くのハードルもあります。

バイオエタノールはサトウキビ、トウモロコシなどから作れます。注目される最大の理由は、地球温暖化を招く二酸化炭素を増やさずに済むからです。

原料となる植物が育つ時、大気中の二酸化炭素を吸うためです。ブラジルやアメリカのように、バイオエタノールを大量に生産・利用している国もあり

ますが、日本は試験段階で、遅れています。そこで、安倍首相は一日、高い目標を松岡利勝・農林水産大臣に示し、実現までの計画作りを指示したのです。テンサイ、サトウキビなどの原料を準備しやすい北海道と沖縄をまず拠点とするよう提案もしました。目標達成の時期は今後決めますが、十五～二十年先になりそうです。

課題もたくさん

目標の実現には多くの課題があります。

まず、年間一・五万

トン級の工場が数百か

所も必要です。それだけの原料を、国内だけで作れるのかも課題です。また、ガソリンと

同じだけ税金がかかる

と、値段が上がって買

ってもらえません。利用法も問題です。

国はガソリンにバイオエタノールを直接混ぜ

る方法を考えています

が、自動車メーカーなどが反対しています。

エンジンに傷める恐れがあるためです。